

第1章 あの日、何があったか

主に地震発生の前後から大津波が役場庁舎を襲うまでの職員の動きを、
時系列に沿って克明に再現しました。

1 地震発生まで

議会散会で平穏な日常

平成23(2011)年3月11日、新町の大槌町役場(※庁舎の配置や町内の地理は56ページ、57ページ参照)。この日は朝からどんよりとした曇りがちの天候で肌寒く、隣接する釜石市の気温は正午を過ぎても7度に届いていませんでした。町役場では折から新年度予算審議の町議会定例会が開かれており、金曜日の11日は午前中に予算特別委員会を構成して散会したところでした。

散会后、通称「裏庁舎」1階の福祉課に、1月に福祉課長から総務課長に異動したばかりの故澤舘純一さん(56)が姿を見せます。「おう」。ワイシャツの袖をまくり上げたまま、幼なじみの中野久実子・福祉班主査に声を掛けると、福祉課長の故関郁夫さん(58)の席へ。2人は週明けの議会再開を控えて、ざっくばらんに意見交換をしていたようです。上司の決裁を取りに大ケ口の水道事業所から役場に來ていた山田美誉輝・上席主査水道班長も、釜石南高校(現金



震災前の役場庁舎。中央棟は震災当時で築57年が経過していた

石高校)の同級生だった関さんと偶然出会い、関さんが1月の人事異動で派遣先の釜石大槌地区行政事務組合(釜石市)から帰任してきたことから、「久しぶりだな」などと会話。役場には普段と変わらない穏やかな空気が流れていました。

昼休み、総務課総務広聴班主事の故佐藤一葉さん(

当時(26)はいつものように、末広町の自宅で家族と食卓を囲んでいました。話題は翌日に予定していた久慈市への家族旅行。「午後には有休取って前泊で行こうか」。母道代さんにそんな提案をしながら、一葉さんは家を出ます。税務会計課長の故祝田眞悟さん(当時(60))も昼食で寺野地区の自宅に帰っていました。妻秀子さんが「3月いっぱいまで定年なんだし、午後は休みにしたら」と持ち掛けますが、祝田さんは「いや、そうもいかないんだ」と役場に向かいました。

午後1時ごろ、町畜産振興公社の職員、故兼澤圭作さん(当時(57))は桜木町の自宅で昼食を取った後、妻萬里子さんに車で送ってもらい、小鎚・三枚堂地区の車両置き場にいました。そこから除雪用のトラクターを運転して、西北に約10⁵離れた新山牧場に配備するためです。「じゃ、行ってくつけえ」。萬里子さんは車に向かって歩く夫の後ろ姿を見送りました。

2 地震発生(15時)

一斉に飛び出す職員たち

午後2時46分、町役場を三陸沖が震源の激しい揺れが襲います。釜石市中妻町では、そのまま立っていることが難しいくらいの震度6弱を観測しました。東棟2階南端の町長室では町長の故加藤宏暉さん(当時(69))と東梅政昭副町長がソファに座り、総務課長の澤舘純一さんが人事案件の打ち合わせに来るのを待っていました。加藤さんはとっさに、ガラス張りの大きなサイドボードが倒れそうになるのを手で押さえました。

「外だ。外に出ろ!」。町長室に隣接する総務課で、課長の澤舘さんが号令し、現町長の平野公三・主幹兼総務広聴班長ら課員と階段を下りていきます。1階の給湯室で地震に遭い、庁舎東側の公道に飛び出した三浦義章・同班主事が総務課に上がると、同班の先輩主事で広報誌担当の故小笠原広樹さん(当時(28))が自席のそばにいました。小笠原さんは「貴重品とかカメ



写真①

ラを持って」と三浦主事に指示し、庁舎前に行きます。後を追って外に出た同主事は、パソコンや観葉植物などが横倒しになった副町長室の様子(写真①)を撮影するよう誰かに命じられ、撮り始めから津波襲来までの30分間、庁舎前の戸外に設営された災害対策本部の状況などを計28枚の写真に収めることとなります。

東棟1階の企画財政課。「室内は危ない」。激しい揺れに課長の故木村圭治さん(当時56)が大声を出しました。同課の壁に掛けられた震度計からは、ひっきりなしに震度を印字したロール紙が吐き出されてきます。木村さんは財務班主事の故鈴木有香里さん(当時28)から課員と共に東棟玄関から庁舎前に出ます。鈴木さんはこの日、体調不良で午前中休んでいましたが、新港町の自宅で昼食後、「仕事があるから」と母みよさんに告げて出勤していました。

佐々木庸介さん「俺たちは残る」

中央棟1階の町民課でも、課長の故佐々賢一さん(当時55)と主幹兼町民生活班長の故金崎健悦さん(当時56)が戸外への避難を呼び掛けます。同課のカウンターでは主任主査国保年金班長の故里館ひろ子さん(当時57)が、応接中だった町民の中年女性にすぐ逃げるように説きました。「こりゃあ、大変だ」。金崎さんは庁舎前で、ワイシャツ姿で飛び出した総務課長の澤舘さんと言葉を交わし、桜木町の自宅にいた妻

正子さんに携帯電話で「早く逃げろ」と伝えます。

本震の直前、中央棟1階の税務会計課では携帯電話の緊急地震速報がけたたましく鳴り響きました。「でかいのが来ます！」。収納班主事の金崎真史さん（28）が叫んだ数秒後、激しい揺れが襲い、森田英之・課税班主任はとっさに外に飛び出します。アスファルトの地面はまるで「豆腐のよう」に「波打ちました。「建物の中に戻るな！」。庁舎前では総務課長の澤舘さんが声を張り上げていました。

中央棟と東棟に挟まれて立つ役場職員組合のプレハブの2階から、浪板圭子書記が同課のカウンターに駆け込んできます。主幹兼出納班長の故佐々木庸介さん（58）が立っていました。「ねえ、どうしたらいいのかな？」。浪板書記はあわてて問います。「早く帰れ、逃げろ。けど、俺たちは残んなきゃねえ」。この後、佐々木さんは庁舎前で、同班主事の女性が用心のために持ち出した手提げ金庫を「総務課の高い所に置いてきてやっから」と受け取って、東棟2階に運んでいきました。

高まる庁舎倒壊の恐れ

総務課・企画財政課が入る東棟と税務会計課・町民課のある中央棟からは、当時執務中だった三十数人の職員が揺れに驚いて庁舎前の広場に出てきます。

鉄筋コンクリート造の中央棟は昭和29（1954）年の竣工で当時築57年、昭和40年代前半に増築された東棟（コンクリートブロック造）は築40年以上を経て、それぞれ著しく老朽化が進んでいました。耐震補強も施されておらず、中央棟1階のモルタル壁は剥がれ落ちている箇所があり、東棟2階の廊下や総務課の床にも複数の亀裂が認められました。加えて、2日前の9日には前震とみられる震度4の揺れが大槌町で観測されており、職員の間では2度の大きな地震で傷んだ庁舎が倒壊するのではないかとの恐れが高まっていました。

大槌町から最も近い観測地点で、南に35キ離れた大船渡市での本震の強震波形を見ると、大きな揺れが2〜3分程度続いています。本震の後、いったんそれぞれ別の課室に戻った職員もいれば、そのまま庁舎前に残った人もいたようです。総務課長の澤舘さんと平野・

総務広聴班長は東棟2階の同課に上がりました。隣接する大槌消防署から道又義明・消防司令補が来て、「消防署は停電してる。何か情報は入ってねえか」と同級生の澤館さんに尋ねます。「いや、こっちもまだ詳しいことは分かんねえんだ」

町民課の室内では、戻ってきた課長の佐々さんと町民生活班長の金崎さんが「すげえ揺れだったな」と顔を見合わせ、津波への警戒感をにじませました。「災対本部を立ち上げねえばな」。金崎さんがつぶやきます。

役場に戻った加藤国雄さん

そこに、安渡地区の漁協で漁業関係者向けの衛生管理の講習会に立ち会う予定だった同課町民生活班主任の故加藤国雄さん（38）が公用車で戻ってきました。地震のすぐ後に会場に現れた加藤さんに、先着していた産業振興課の藤枝昭彦・水産商工班主任が「講習会は中止。津波が来るから早く逃げて」と伝えますが、役場に向かってしまったのです。漁協から車で約5分。加藤さんが町民課に姿を見せたのは午後3時前

だと思われれます。加藤さんは少なくとも津波襲来の5分前まで役場に居続け、災対本部の設営作業などに携わります。

町民課国保年金班の金野匠主事が、災害時に担当する大念寺の避難所に向かおうと庁舎前で自転車のペダルをこぎ出すと、同班長の里館さんが「どこ行くの？」と尋ねます。そばに総務課職員情報班主事の故齊藤充さん（31）もいて、同級生で親友の金野主事は「大丈夫か」と声を掛けます。「おお」。齊藤さんは短く答えました。

里館さんはこの後、役場東側の駐車場に止めた自家用車の黒いステーションワゴンに乗って海辺の新港町の自宅に向かいます。愛犬のラブラドルレトリバーを避難させるためでした。通常、駐車場南側の県道大槌小槌線を東進して大槌川にかかる大槌大橋を渡りますが、この日に限って、北上して同橋より上流の安渡橋方面に車を走らせます。裏庁舎北側の公道に出ている福祉課の越田由美子・介護班長が発車する様子を見ていました。

里館さんは津波で大槌大橋のたもとに設置された

陸閘（水門）が閉まることを予期して、安渡橋に回ったと思われます。当時町内でイルカ漁を監視していた米国の反捕鯨団体が、レンタカーと思われる車で避難中に沿道をビデオ撮影していて、自宅前で車に乗り込む里館さんの姿を偶然収めていました。車内のデジタル時計によると、午後2時55分のことでした。



里館ひろ子さんが津波による閉鎖を予期したと思われる大槌大橋の陸閘。実際は閉められなかった

倉堀健さん、消防署に向かう

中央棟の北側に隣接し、平成14（2002）年に完成した木造2階建ての通称「裏庁舎」の状況はどうだったのでしょうか。裏庁舎には1階に福祉課、2階に産業振興課と地域整備課が入っていました。

福祉課の三浦大介・福祉班長は釜石市での用務を終えて公用車で帰庁し、裏庁舎北側玄関の自動ドアをくぐり、廊下を歩いていました。「班長、地震ですー」。臨時職員の故菊池則子さん「当時（51）」が飛び出してきました。「え、地震？」。次の瞬間、三浦班長は大きな横揺れを感じ、よろめきながら福祉課の自席にたどり着きます。

福祉課は当時、約20人の職員が在室していました。午後1時から須賀町分庁舎であった三種混合の予防接種が終わり、戻ってきた健康推進班の保健師らが後処理などに追われているところに揺れが襲いました。課長の関郁夫さんをはじめ、多くの職員が裏庁舎北側の玄関から外に出ます。激しい揺れに、玄関の自動ドアの上からパラパラと白い粉のような物が落ち、隣接す

る民家のブロック塀も崩れました。

関さんは「これはやばいぞ」と言っ、裏庁舎の東側を回って本庁舎（※裏庁舎以外の各棟を指す）方面に駆け出しました。介護班主事の故倉堀健さん（待し） 当時（30）は役場から近い大町に住居があり、災対本部の任務に就く「本部指名職員」で、関さんと同レベルをたどりました。ほぼその足で大槌消防署に行ったとみられ、1階にいた白澤岳・消防副士長に「被害の連絡は入っていませんか」と尋ねています。本震の直後でまだ報告が上がっていないと知ると、すぐに立ち去ったといひます。本震が収まった後、健康推進班の藤原純枝・主査保健師が部屋に戻ると、臨時職員の菊池さんが散乱した書類を片付けていました。

2階東側の産業振興課。小刻みだった揺れがだんだん大きくなつていきます。「2日前の地震の余震かな」。白澤洋喜・農政班主事がそう思ったのもつかの間、1分ほどで揺れは最大に。「テレビ、倒せ!」。関貴紀・同班主査が叫び、棚やデスクから液晶テレビやパソコンのモニターが落ちないように白澤主事と共に横に伏せました。課長の故佐々木良一さん 当時（56）は倒れ掛

かってくるキャビネットを体ごと押さえつけます。当時室内にいた臨時職員2人を含む9人が外に出ました。

「これ、逃げた方がいいんじゃないでしょうか」。前後して白澤主事が声を上げ、八幡まゆみ・水産商工班主任や佐々木直美・臨時職員は高台の城山方面に向かうために所持品を持ち出します。2人が階段を下りていくと、1階の踊り場付近で2階に上がろうとする課長の佐々木良一さんとすれ違いました。「どこさ行く?」「いやあ、避難するんですよ」「そうか、氣い付けてな」。短いやり取りがあつて、八幡主任は裏庁舎を後にします。直後の午後2時50分、同主任は携帯電話で母親に安否確認のメールを送り、約200以離れた城山のふもとの江岸寺まで歩いてから周辺で住民の避難誘導に従事。関貴紀主査と白澤主事も避難所や避難誘導の持ち場に就くために、関主査の自家用車に同乗して出発しました。

待機した地域整備課

2階西側の地域整備課には当時、女性の臨時職員2

人を含む13人がいて、そのうち11人が津波の犠牲になりました。上席主査管理班長の故三浦英人さん（55）は、助かった職員2人のうちの1人、小國植也・同班主事と釜石市の県沿岸広域振興局であった会合に出席し、同課に戻った数十分後に地震が起きます。激しい揺れに、書棚のファイル類のほとんどはバラバラと床に落ちました。三浦さんは席の近い臨時職員、故押野千恵さん（26）が怖がるのをなだめます。

管理班主事の故前川美知さん（32）は、隣席でもう1人の生存職員、久保晴紀・同班主事と背後の書棚が倒れないように押さえました。前川さんはこの日、午前中に長女の通う保育園で参観があり、午後から出勤していました。「つながらない、つながらない」。携帯電話で誰かに連絡を取ろうとしますが、不通だったようです。右隣に席があり、就労から日が浅い臨時職員の故小國奈穂子さん（25）には「家、どこだっけ？ 安渡？」と声を掛けるなど、前川さんは特に自分と同性の若い臨時職員2人を気遣っていました。「ひとまず、待機すっぺし。見回りの準備もしてけんねえか」。課長の故小川千里さん（58）は部

下にこう命じて、いったん部屋から出ていきます。同課は災害時、「ライフライン関係課」と位置付けられ、道路や下水道といった公共土木施設の被害調査とその保全・復旧などを担当する決まりになっていました。管理班はそれらの手配や連絡、技師らでつくる工務班は実務を担います。小川さんの指示は、それゆえでした。この時点では前述の職員のほか、管理班主事の故中村仁人さん（24）、主幹兼工務班長の故岩間久さん（57）、同班主査の故三浦徳幸さん（44）、同班主任技師の故八幡力さん（36）、同班技師の故川端大佑さん（30）、同班主事の故佐藤拓也さん（29）がそろっていました。

本庁舎に急ぐ前川正志さん

中央棟の西北側に接して2階建ての西棟があり、2階の議会事務局には主任主査監査班長の故前川正志さん（52）ら職員3人が在室していました。澤館悦子・議事班主任書記は徐々に大きくなる揺れに、避難路を確保するため、外階段につながる扉を開けに行

きます。外階段踊り場の柱にしがみついて揺れが収まるのを待った後、隣接する裏庁舎西面の窓に目をやりますが、ブラインドが下りていて地域整備課のある窓の向こう側はうかがえませんでした。階段を下りた所で産業振興課長の佐々木さんと出会い、「ひどい揺れでしたね」と話し掛けます。裏庁舎の玄関付近には20人ほどの職員が出ていました。

澤館主任書記がすぐに議会事務局に戻ると、コートを着込んだ前川さんと主任主査議事班長が、中央棟北の増築庁舎につながる長い廊下を並んで歩いているところでした。同事務局職員は災对本部の「総務部」に属し、総務課員と共に同本部を統括する任務に就くことになっていました。

祝田眞悟さんは避難誘導

役場から150メートル余り西にある末広町の集会施設「御社地ふれあいセンター」の2階会議室では、税務会計課課税班主任の故上野芳子さん〓当時(34)〓ら同班の職員4人と臨時職員1人が確定申告の受付業務を

していました。長く、激しい横揺れが収まると、田中恭悦・課税班長や管理人の小向幹雄さんが来場者に城山に避難するよう呼び掛けます。この日は3階で中心街町方地区の婦人会のメンバー10人ほどが踊りの練習をしていました。この中には上野さんの母上野ヒデさん(2018年に逝去)もいました。

課税班職員は館内を見回った後に戸外に出ました。芳子さんと一緒にいた同班主任はこの時か、午後3時



上野芳子さんら課税班員が確定申告業務をしていた御社地ふれあいセンター=2003年8月撮影

ごろに徒歩で新町に住む実母の安否を確認して戻ってきた後、税務会計課長の祝田眞悟さんがセンター前の町道を挟んで北側のアスファルトの広場で来場者や住民の避難誘導に当たって

るのを見ました。「こっちはです。こっちにきてください」。祝田さんは建物からの落下物などを恐れて、向かいの広場に手招いているようだったといっています。

福祉課主任主査地域包括支援センター班の班長、故阿部久美子さん(当時51)、社会福祉士の故小笠原裕香さん(当時26)、臨時職員の故岩間成子さん(当時44)は、ケアマネジャーの研修会を運営する用務で釜石市大町の釜石市民文化会館に来ていました。開会からほぼ15分後、激しい揺れが会場を襲い、阿部さんらは参加者が避難したのを確かめてから、同行者の運転で役場に向かいます。

防災無線に警戒

午後2時49分、気象庁は岩手県に大津波警報を出すとともに、予想される津波の高さを3メートルと発表し、各放送局も速報します。裏庁舎の地域整備課で携帯電話のワンセグ放送を見ていた小國楨也・管理班主事は、同班長の三浦英人さんにこのことを伝えました。庁舎内外にいた職員たちも同様に情報を得ていたはずですが、

同56分過ぎ。「ただ今、岩手県沿岸に大津波警報が発表されており、海岸部の皆さんは、定められた避難場所へただちに避難してください」。町内23カ所に設置された防災行政無線のスピーカーからサイレンとアナウンスが流れます。大槌消防署の白澤副士長が、停電後に自家発電機の電力で映し出されたテレビ画面



役場庁舎のほぼ東側に隣接し、高台避難を呼び掛ける放送をした大槌消防署＝震災前に撮影

に「大津波警報」の字幕が流れているのを見て、放送したのです。庁舎周辺で防災行政無線を聞いた企画財政課の澤舘和彦・上席主査財務班長は、指定緊急避難場所の「大ケ口裏山」の誘導担当者が当日不在だったために、

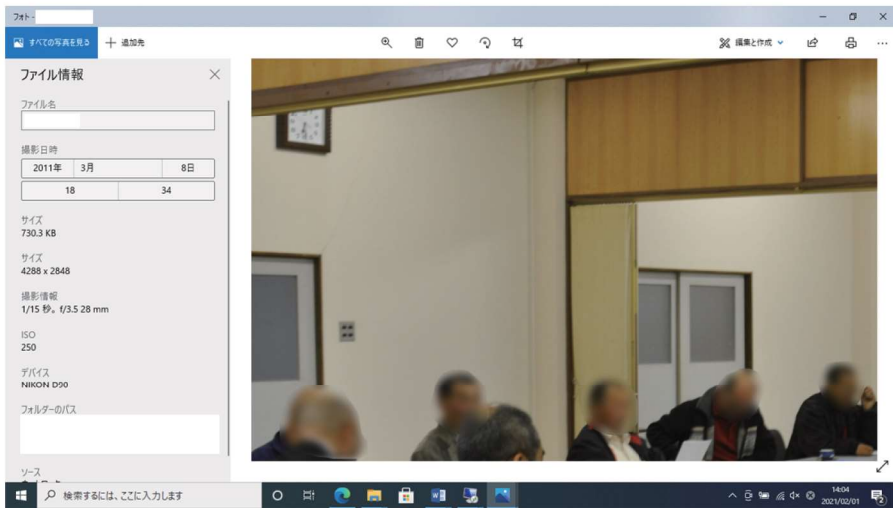
以前の担当者として同所に向かおうとします。廊下にあったロッカーからコートを取り出して、準備のため同課に戻ると、財務班主事の鈴木さんが茶色っぽいジャージーに着替えた状態でした。「家にいる姉さんの子どもたちは大丈夫か」。当時、小学生の甥3人が一時的に鈴木さん宅で生活していることを知っていた澤舘班長が心配して尋ねると、「北小（大槌北小学校）にいるから大丈夫です」と答えました。鈴木さんはこの後、再び庁舎前に出ます。

裏庁舎の玄関付近に部下の保健師たちと出ていた福祉課の上席主査健康推進班長も、防災行政無線の放送に津波への危機感を高めます。すぐ近くでは介護班主事の倉堀さんが同級生と思われる町民の女性を諭していました。「津波が来るから早く逃げろ」。倉堀さんは裏庁舎と本庁舎の間を何度か往復していた可能性がありますが。このころ、福祉班の黒澤直美主任に、臨時職員菊池さんが「家に高齢の母がいます。帰ってもいいですか」と不安げな表情で尋ねます。

進んでいたデジカメの時刻

本震の後、同51分から58分にかけて、福島県沖や茨城県沖が震源の震度3（釜石市で観測）などの余震が4回起きました。本震の時に母親と大町の外科医院にいた議会事務局の赤崎仁一事務局長は、本町の自宅で防災服に着替えてから自転車で役場に向かい、まっすぐ東棟2階の町長室に入ります。そこには町長の加藤さんと東梅副町長がいました。余震が続く中、この2人は一緒に外に出たとみられます。「寒いから上っ張りを着た方がいいな」。加藤さんは階段を下りる途中、東梅副町長にこう話し掛けました。

三浦義章・総務広聴班主事がこの時間帯の庁舎前の様子を連続して5枚の写真に収めています。総務課備品で広報誌の制作業務に使っていたデジタルカメラに記録された時間帯は、内蔵の時計によると3月11日午後3時2分から3分の約2分間。さらに津波が庁舎を直撃した画像を撮った時刻は同3時26分となっています。しかし、これらの時刻は次のような根拠により、約5分進んでいると考えられます。



2011年3月8日撮影の写真（部分）とファイル情報。壁掛け時計が6時29分付近を指している

- ①同カメラの導入以来、正確に時刻合わせをした記憶が三浦主事にないこと。
- ②同カメラで3月8日午後6時34分撮影の記録がある役場会議室内の風景で、壁掛け時計の針が同29分付近を指していること。



植田俊郎さんが3月11日午後3時22分に撮影した大町、須賀町一帯を水没させる津波

- ③当時大町在住の医師植田俊郎さんが津波の前年暮れに購入し、時刻合わせをしたとされるカメラで、役場のあった新町に隣接する大町、須賀町一帯が津波で水没した状況を撮影した時刻が午後3時22分であること。

④小笠原純一・学務課学務班主任が城山に立つ中央公民館で、午後3時21分から2分30秒間、携帯電話のカメラで撮影した町内の映像に、JR大槌駅(当時)の背後から迫る津波が中心街の町方地区に流れ込み、完全に浸水させる様子が収められていること。

⑤城山に避難した産業振興課の佐々木直美・臨時職員が携帯電話のカメラで午後3時21分と22分の2回、それぞれ約15秒間撮影した動画で、前者に安渡方面を襲う津波、後者に町方に押し寄せる津波が映っていること。

⑥津波を撮影した小笠原主任、佐々木臨時職員の常用する携帯電話の時計が遅れたり、進んだりしていた可能性は極めて低いこと。

余震相次ぎ庁舎前に

備品が散乱する副町長室の様子を撮影した三浦主事はカメラを携行したまま、先輩主事の小笠原広樹さんと自家発電機の燃料を探しに東棟1階倉庫に入りま

す。この時、余震が襲います。「やべえ、やめとこう」。

断続する揺れに2人は燃料調達をいったん諦めます。三浦主事は階段下の倉庫から目と鼻の先の東棟玄関を出て、推定午後2時57～58分に写真②③④⑤⑥を撮影したようです。写真②や④に納まる職員たちは相次ぐ余震におびえて庁舎前に出てきた姿だと推測できません。停電のため、東棟玄関には照明がついていません。

写真②③④の推定撮影時刻午後2時57分は消防署が最初に防災行政無線を流した時間帯と重なり、職員たちは戸外でこの放送をはっきり聞こうとしていたとも考えられます。当時、庁舎前駐車場の西側の一角に防災行政無線の拡声器を付設した鉄柱が立っていて、写真③右側の東梅副町長は明らかに鉄柱の方角に体を向けています。

写真②の左側には、東棟玄関から出た直後らしい町長の加藤さんの後ろ姿が写り込んでいます。その前方には東梅副町長もいます。また、いずれも後ろ姿で、携帯電話に見入る総務課総務広聴班主任の故藤原宏一郎さん(当時35)、茶色のコートを着た同班主事の佐藤一葉さん、税務会計課長の祝田さん、国保年金班長の里舘さんが見えます。



写真②



写真③



写真④

厚手の上着を着て歩く様子の祝田さんは、確定申告会場の御社地ふれあいセンターに向かおうとしていたのかもしれない。里舘さんは自宅から車で飼犬を連れて戻ってきたばかりだと思われる。東棟玄関前にはすでに、東棟1階倉庫にあったとみられる小型の自家発電機が運び出されています。

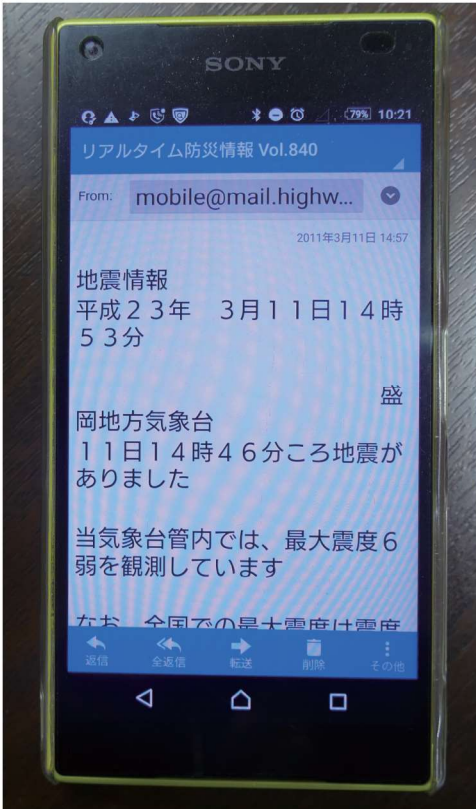
「携帯、忘れてっぞ」。このころ、佐藤さんの7歳違いの弟弘誓^{ひろちか}さんが庁舎前に携帯電話を届けに来ます。昼休みに帰宅した佐藤さんが携帯電話を充電器に差し込んだままだったのに母道代さんが気付き、弘誓さんに持たせたのです。「大きな津波が来そうだから母さんと逃げて」。佐藤さんは短く伝え、弘誓さんと道代

さんは津波の直前に城山に避難しました。

写真③では、庁舎前に、作業着に長靴を履いた地域整備課長の小川さんが現れます。町長の加藤さんは東棟前にある手押し式の井戸水ポンプの上部から水があふれ出ているのに気付いたらしく、そちらに歩を進めます。

公用車回せと木村圭治さん

東棟玄関前には、弘誓さんから手渡された白い携帯電話を手にする佐藤さんや藤原さん、携帯電話を横向きにして企画財政課の菊池信也・財務班主事とワンセ



役場があった新町に隣接の末広町で、職員の1人が受信した災害モバイルメール。右上に受信時刻「14:57」が表示されている

グ放送を見ているらしい同課長の木村さん、産業振興課長の佐々木さん、介護班主事の倉堀さん、監査班長の前川さんらがいます(写真④)。菊池主事の記憶ではワンセグ放送をうまく受信できず、木村さんはこの後、カーラジオを聞くために駐車場から公用車を回して行くよう同主事に指示します。

写真④では②と同様に多くの職員が携帯電話を操作しており、岩手県の災害モバイルメール「リアルタイム防災情報」を一斉に見ている可能性があります。

発災後2件目の同メールは盛岡地方気象台管内で震度6弱を観測したとの本震の情報を配信していて、庁舎周辺では午後2時57分に受信された記録が残っています。「57分」は写真②や④の推定撮影時刻と一致します。

澤舘純一さん、本部設置を指示

そして、この時まさに白いワイシャツ姿の総務課長の澤舘さんが東棟玄関から外に出ようとしていました(写真④)。このように度重なる余震が庁舎倒壊の恐れ



写真⑤



写真⑥

を増幅させ、従来なら総務課内に設置する災対本部を庁舎前に構える流れや雰囲気を方向づけていきます。総務広聴班長だった平野現町長の記憶では、前後して澤舘さんが町長を本部長とする災対本部の設置を命じました。赤崎・議会事務局長によると、企画財政課長の木村さんも「上(総務課)では危ないから、ここでやっ

ぺし」と話していました。

「施設の点検のために職員を待機させています」。地域整備課長の小川さんは庁舎前で災対副本部長の東梅副町長や澤舘さんに報告。このころ、裏庁舎の福祉課から黒澤・福祉班主任が本庁舎周辺の様子を探りに来ます。庁舎前で国保年金班長の里舘さんに状況を尋ね

ると、携帯電話を手に「停電で情報が入らないからワンセグを見ているよ」と応じました。井戸水ポンプの異変に気付いた町長の加藤さんはハンドルに手を掛け、津波の兆候と思われる水が噴き出す様子を観察し始めます(写真⑤⑥)。黒澤主任は「すごいですね」と話し掛け、大きな動きがないと判断すると再び裏庁舎に戻っていきました。

3 15時〜同10分

避難命じた関郁夫さん

裏庁舎の福祉課。北側玄関付近で大津波警報の防災行政無線を聞いた健康推進班長が急いで室内に入ると、本庁舎方面から戻ってきたらしい課長の関郁夫さんがいました。「私たち、もう逃げます」。同班長がこう告げると、関さんはすかさず命じます。「安全に気を付けて、全員避難しろ」。同班の阿部静子保健師がこの場面をよく覚えていました。

同班長も「貴重品を一つだけ持って、上（城山）に逃げて！」と大声を出し、班員の保健師たちや庁舎前から帰ってきた黒澤直美・福祉班主任が一気に呼応して避難を開始します。臨時職員の菊池則子さんはこの前後に末広町の自宅に向かったとみられます。姉眞理子さんによると、菊池さんは母綾子さん（2020年に逝去）を軽自動車に乗せて同町の蓮乗寺に避難させた後、「役場に行かなきゃ」と寺を後にします。

関さんは自宅に保管してある防災服に着替えてくる

と言い、自席の背後に掛けていた作業着かコートのよなものを羽織って、かばんを手に部屋を出ていきます。すぐに1階のロッカー室付近で、中野久実子・福祉班主査が応急医療キットを持ち出そうとするのを見とがめ、こう指示しました。「そんなことは後でいいから、まず町民に声を掛けながら上に逃げろ」。これに従って中野主査は黒澤・同班主任と行動を共にし、道すがら出会った妊婦を助けながら城山の斜面を上がります。健康推進班の保健師たちも主に末広町の家々の戸口で避難を呼び掛けたり、高齢者の車いすを押したりしつつ移動しました。

裏庁舎の北側玄関を抜けた関さんは職員駐車場に向かうために公道に出ます。そこで、大ケ口の緊急避難場所へ住民の誘導に行こうと、別の駐車場まで歩く澤舘和彦・財務班長とすれ違います。関さんは、福祉課長として初の災害対応であることを意識してか「初めてのことからよく分からなくてなあ」とつぶやきました。そして「着替えてくる」と伝え、澤舘班長と別れました。

関さんは役場の東側にある駐車場にセダンタイプで



健康推進班員らが避難を呼び掛けた末広町の町並み=2004年3月撮影

黒っぽいパールの自家用車を置いていました。車に乗り込んだところで、隣接するアパートに住み、城山に避難しようとする姪、その3歳の長男と顔を合わせます。関さんはウインドー越しに「早く逃げろよ」と声を掛け、姪は「おじちゃんもね」と返しました。

さらにその後の時間帯。姪の安否を確認しに柵内地

区の職場から駆け付けた関さんの義弟は同じ駐車場で、車を降りてきた関さんと出会います。娘一家の不在を案じる義弟に、「娘は逃げたよ」と関さん。誰かをどこかに送ってきたようなことも言い、駐車場を後にして役場庁舎東棟の通用口に入って行きました。

関さんが役場を出発したのは午後3時ごろで、須賀町の自宅に滞在していたと仮定すると、戻ってきたのは同10分前後だと推測されます。また、自宅に向かう途中らしい関さんが役場西側の公道にいったん停車し、庁舎前の様子をうかがってから再び乗車する姿を、税務会計課の太田和浩・収納班主任が目撃していました。

臨時職員2人が室外へ

一方、裏庁舎2階で「ライフライン関係課」の地域整備課は午後3時ごろ、1階福祉課の避難の動きが伝わった様子もなく、全員が待機したままでした。2階産業振興課の小笠原佑樹・水産商工班主事は、用務で本町の岩手銀行大槌支店に入店しようとする時に本震

に遭い、御社地ふれあいセンター前で税務会計課職員が住民を避難誘導する姿を横目に見ながら裏庁舎に戻りました。この時、すでに玄関付近では福祉課職員が避難を始めていました。

小笠原佑樹主事は2階に上がる階段の途中、地域整備課から臨時職員の小國奈穂子さんと押野千恵さんが連れ立って出てくるのを見たといいます。しかし、この時間帯以降に2人が部屋にいたとの証言もあり、何らかの事情でいったん部屋を出てまた戻ったか、あるいは、同主事がさらに後の時間帯にも裏庁舎に出入りしていることから、部屋を出る2人を目撃したのはその時である可能性も否定できません。

末広町の御社地ふれあいセンターでは、課税班主任の上野芳子さんともう1人の同班主任が2階申告会場から私物のバッグなどを引き上げ、今後の指示を仰ぐために役場に行こうとします。2人は大津波警報が出た1年前のチリ地震津波で炊き出しをした経験などから、「今日も長くなりそうだね」と会話。「芳子、芳子」。その時、3階で踊りの稽古をしていた母ヒデさんが芳子さん呼び止めました。センターの玄関付近で、ヒ

デさんと婦人会連合会役員の高橋康子さんが「行かないで」と懇願しますが、「戻れないから」と振り切ります。センターを出た芳子さんらは途中、城山方面に向かう黒澤・福祉班主任らとすれ違い、役場に着きました。午後3時から同5分の間のことだと思われま

本部設営始まる

庁舎東棟玄関の周辺では災対本部設営の動きがにわかに慌ただしくなってきました。総務広聴班主任の藤原宏一郎さんが同課の若手職員らをてきぱきと動かしま

す。一方、総務課職員情報班主任の故花石一さんⅡ当時(25)Ⅱは正面玄関の前辺りで、独り言のようにこんなことをつぶやいていました。「これはもう、逃げた方がいいんじゃないか」

城山中腹に立つ中央公民館で地震に遭い、館内の安全確認などを済ませた伊藤正治教育長(災対副本部長)は城山の江岸寺墓地の斜面を急ぎ足で下り、避難してくる福祉課職員たちとすれ違いながら、午後3時5分ごろ、役場に到着。この時点で、総務課の職員が中心

となり、いすや長机を動かして始めていました。伊藤教育長と、さらにこの後に御社地ふれあいセンターから役場に来た田中恭悦・課税班長も町長の加藤宏暉さんが井戸水ポンプを観察する姿を目撃しており、加藤さんは井戸水の異変をずっと気にしていたようです。

財務班主事の鈴木有香里さんは長いコートを着け、東棟付近に心細そうな表情で立っています。末広町で住民に避難を促していた健康推進班の阿部静子保健師が車いすを調達しに本庁舎に来た際、その姿を見ていました。阿部保健師が中央棟玄関に入ると、町民生活班長の金崎健悦さんと同班主任の加藤国雄さんも町民課フロアにいたといいます。

鈴木さんは傍らにいる森田英之・課税班主任に「今日は（午前中）休みだったんです」と話し掛けます。

そのうち、不安が高じてしくしくと泣き始め、伊藤幸人・企画班長が「大丈夫だから」と慰めます。豪放な性格で知られる国保年金班長の里館ひろ子さんは「泣くんじゃない!」と叱咤の声を上げました。里館さんはまた、御社地ふれあいセンターから役場に着いた課税班主任が「おうちの犬が心配ですね」と声を掛ける



福祉課職員らの避難経路となった江岸寺墓地の斜面

と、「実はもう連れてきてあるの」と言い、「（自宅周辺の）床上浸水は免れないかな」と案じていました。午後3時6分と8分には岩手県沖が震源の余震が起き、釜石市でそれぞれ震度4と3を記録しています。中野・福祉班主査はこの時、避難の途中に末広町で出会った妊婦の乳児を抱き、城山の江岸寺墓地の斜面を

上がっている最中でした。立ってられないほどの大きな揺れで、思わずしゃがみ込んだといいます。

地域整備課に解錠要請

裏庁舎2階の地域整備課では動きがありました。城山の中央公民館にある生涯学習課の鎌田精造・社会文化班長が増え続ける避難者のため、冬季で閉鎖中だった城山公園の公衆トイレのシャッターを開けてほしいと、鍵を管理する地域整備課に電話で依頼します。応じた管理班長の三浦英人さんは災害対応上の理由などから課員や公用車の出勤に当初難色を示しますが、結局、同班の久保晴紀、小國槇也の両主事に鍵を届けるよう命じました。

柵内地区の後藤採鉱所において地震に遭った高木電気管理事務所代表の高木正基さんは中心街の町方地区に向かい、県道大槌小鏈線の渋滞が激しかったため末広町の御社地公園に駐車。その場で午後3時5分ごろ、前年のチリ地震津波の時に大町の排水施設「大町雨水ポンプ場」で浸水に備えて待機したことを思い起こし、



生涯学習課が地域整備課に解錠を要請した城山公園の公衆トイレ

指示を仰ぐようと地域整備課に電話をしたものの話の中でした。同課工務班主任技師の八幡力さんの携帯電話にも連絡を入れた記憶がありますが、やはり不通だったといいます。

農政班の関貴紀主査と白澤洋喜主事は車で担当の指定避難場所である小鏈神社などに向かいますが、午後3時過ぎ、役場前の県道大槌小鏈線で渋滞に巻き込まれます。白澤主事は降車して防寒着を着込もうと本町の自宅へ行き、関主査は車を裏庁舎北側の公道に回しました。同主査が2階の同課に立ち寄ってから階段を下りた時、階下から課長の佐々木良一さんが上がってきました。

「道が混んでたから戻ってきたんですけどまた（持ち場に）行ってきます」。「おう、そうか」。佐々木さんは何らかの用事があったて庁舎前から再び同課に来たようです。

4 15時10分 ～ 同20分

中村仁人さん、業者に安否確認

地域整備課で待機中の管理班主事の中村仁人さんは午後3時10分過ぎ、花輪田地区の下水処理場「大槌浄化センター」を運営するテツゲン東北支店の大槌事業所長佐々木智祐のりまささんに携帯電話で安否確認の連絡をします。佐々木さんが職員3人と共に車で上町の大槌小学校に避難した後、徒歩で城山に上がる途中であることを伝えると「それならよかったです」と応答。配管が大破するなどした同センターの被災状況についても通話したようです。

本部設営で慌ただしく

三浦義章・総務広聴班主事は井戸水ポンプに手を掛ける町長の加藤宏暉さんの姿を撮ってから17分後、再び災対本部周辺の状況を記録し始めます。このうち、推定午後3時15分撮影の1分間の連続写真5枚には、本部立ち上げで慌ただしく長机やパイプいすを運ぶなどする職員たちの姿が写り込んでいます。

写真⑦には長机を持ち上げる町民生活班主任の加藤国雄さんと監查班長の前川正志さん、いすに手を掛けていると思われる総務広聴班主事の小笠原広樹さん、その隣で指揮をしているように見える町民生活班長の金崎健悦さん、後ろ姿の産業振興課長の佐々木良一さん、置かれた長机の前に立つ総務広聴班主任の藤原宏一郎さんの姿があります。

中央棟1階町民室の窓から机を運び出す後ろ姿の作業着の人物は、御社地ふれあいセンターを出て大町の自宅付近で水路の状況を観察してから午後3時10分ごろに役場に到着した田中恭悦・課税班長です。町民室の窓枠の向こう側の室内から同班長に机を手渡してい



写真⑦

るのが出納班長の佐々木庸介さんだといいます。伊藤幸人・企画班長はこのころ、金崎さんが「もつといすが欲しい」などと声を上げるのを聞いています。この時、少なくとも会議用の長机3脚とパイプいす14脚が中央棟と増築された東棟の接合部付近、すなわち中央棟正面玄関と東棟玄関に挟まれたスペースに置

かれています。机の端には「大槌町災害対策本部」の木製看板が掛けられ、机上に町の都市計画図と思われる白地図も広げられています。総務課から看板を持ち出してきたのは藤原さんで、写真左端に写る伊藤正治教育長がその様子を目撃していました。

また、時系列で災害対応の経過を記入する「災害発生即対応表」が黄色のボードに張り出されていますが、設置したばかりなのか、まだ何も書かれています。黄色の自家発電機は18分前に撮られた写真と同じ位置にあります。三浦・総務広聴班主事の記憶では、この発電機はうまく作動せず、一連の写真には写っていないもつと大型の発電機を用いて東棟2階総務課にあった潮位計を動かしたといいます。

防災手帳に見入る藤原宏一郎さん

写真⑧⑨⑩の机の前では総務課長の澤舘純一さんと総務広聴班主任の藤原さんが並び立ち、澤舘さんは手にした携帯電話の画面に見入り、藤原さんは前年に職員全員に配布された「大槌町職員用防災手帳」に目を



写真⑧



写真⑨

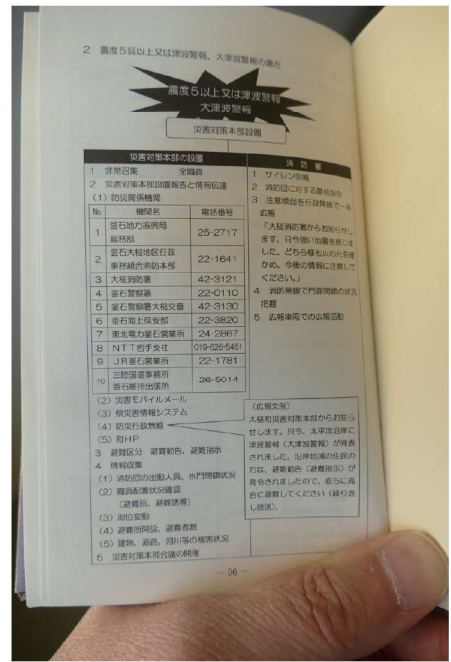
落としています。手帳には二つ折りにしたA4紙と思われるメモが裏表紙に近い所に挟んであり、上部に「小鍮川水門閉鎖 15:00」と走り書きされているのが認められます。

小鍮川河口と大槌湾を隔てる同水門は大槌消防署の2階から遠隔操作できるようになっており、当時の

佐々毅署長が津波に備えて閉鎖しました。メモは情報を聞いた藤原さん自身が書き込んだか、消防署員、あるいは署に立ち寄った役場職員によってもたらされた可能性があります。

藤原さんが持つ手帳の前半部分には、しおりの代わりに薄緑色の付箋が貼ってあり、それは震度5弱以上の

の地震発生や津波警報・大津波警報が発表された場合に災对本部を役場の所在地に設置する決まり（仮本部の位置は中央公民館）を明記した12ページ目かもしれません。では、藤原さんの視線の先に開かれているのは何ページでしょうか。「水門閉鎖」のメモを挟んでいた箇所がもし裏表紙の内側（いわゆる表3）だとしたら、それは最終の96ページ、災对本部設置後の情報伝達や避難勧告・指示の発令、避難所開設といった手順のほか、防災行政無線のアナウンス文例などを示したマニュアルの部分ということになります。



藤原宏一郎さんが見入っていた可能性のある職員用防災手帳の96頁

次の瞬間、カメラは少し引いて、東棟玄関前の状況を広めに捉えます（写真⑩）。澤舘さん、藤原さんのほか、総務広聴班主事の佐藤一葉さんが手を胸の前で組むような格好で写り込んでいて、災对本部周辺では常に落ち着き払った態度だったといえます。

災对本部の黄色い腕章を着けた菊池信也・財務班主事の右側には、同主事が役場北側の駐車場から乗ってきた公用の白い軽自動車が止まっています。これは写真④（25ページ）で同主事と企画財政課長の木村圭治さんが携帯電話のワンセグ放送を受信できなかったため、カーラジオで情報を集めようと木村さんが命じて持ってこさせたものです。さらに同主事の左後ろ、東棟玄



写真⑩

関の前に同班主事の鈴木有香里さんの顔の一部と足元が見えます。写真⑪で長机は5脚並べられました。身振りをして何か話しているような町民生活班長の金崎さんや同班主任の加藤さん、総務広聴班主事の小笠原広樹さんがいます。平野公三・総務広聴班長はパイプイスを運び、



写真⑪

後ろ姿の伊藤教育長は本部設営の動きを見守っているようです。

この時間帯、庁舎前には約40人の職員がいたと推定されます。そのうち半数以上が町長や副町長、教育長、各課長、総務課職員など災対本部の運営に直接関わる人員。残りは指定避難場所や避難誘導などの担当に任

じられていない一般の職員たちで、慌ただしい動きがあった災対本部のテーブルから2〜3メートル離れた中央棟正面玄関の前辺りに待機し、何か指示があれば従おうという態勢でした。この中で出納班主事は「どうしていいか分からず」遠巻きに見守っていたといいます。

出動直前だった三浦徳幸さん

午後3時10分過ぎ、裏庁舎2階の地域整備課。城山公園の公衆トイレの鍵を携えた管理班の久保晴紀、小國槇也両主事が出動します。小國主事が1階ロッカー室でヘルメットや長靴で身支度してから同課に上がると、ドア付近の壁に張り出された模造紙の災害対応表に、同班主事の前川美知さんが時系列の記録を書き込んでいるところでした。

裏庁舎北側の駐車場の出入り口では、工務班主査の三浦徳幸さんがパトロール用の黄色い四輪駆動車のエンジンをかけ、海のある南側に車の頭を向けて止めていました。三浦さんは運転席右側の車外に立ち、カーラジオを聞いています。久保主事は「城山に行ってきた



三浦徳幸さんが出動準備をしていた裏庁舎(写真中央の2階建て)北側の駐車場=2003年8月撮影



釜石港に到達した津波と岩手県の津波予想高さ「6m」を報じるニュース映像=NHKの放送から

ます」と声を掛けて無線機を積んだ白い公用車のバンの運転席に、小國主事は助手席に乗り込んで走りだしました。

三浦大介・福祉班長は大津波警報発表後、沢山地区の大槌北小学児童保育室の状況を確認めに車で行こうとして渋滞に巻き込まれ、同乗していた部下を徒歩で同

小に向かわせてから引き返してきました。裏庁舎北側の駐車場に着くと、工務班主査の三浦徳幸さんから2人が一緒に携帯電話のワンセグ放送を見ていました。

「だー、津波が来てっぞ」。このころ、NHKでは宮古市や釜石市に到達した津波の様子が中継されており、午後3時14分から20分の間に2度、釜石港で車や

漁船が流されるなどする状況が映りました。城山に向かう小國・管理班主事は末広町の北日本銀行大槌支店付近の県道を走行中、釜石の映像に気付いたといいます。

「ここさいては(津波が)来っかもしれないから逃げた方がいいがねえ」。三浦大介班長はこう2人に話し掛けてから、公用車のキーを裏庁舎1階の福祉課に返却。課員が避難した後の室内は無人で、同班長は建物の中を通り抜けて隣接する中央棟に入って行きます。「早く津波のことを知らせ

ねえば」。停電で薄暗い1階の税務会計課や町民課には誰もいません。外光が差し込む中央棟正面玄関を出ると、災対本部の設営で忙しく立ち働く職員たちがいました。

その中で職員情報班主事の齊藤充さんは自家発電機のような機械を運んでいました。三浦義章・総務広聴班主事が推定午後3時15分に撮った写真⑨(35頁)では災害発生即対応表の後ろ側、東棟玄関前付近に後ろ姿の齊藤さんがいます。

計器観察する加藤宏暉さん

三浦大介班長は庁舎前で総務課長の澤舘さんや平野・総務広聴班長を探し回りますが、見つけれませんが。平野班長はこの時間帯、役場の東側を流れる水路(沼崎川)の様子を観察しに行っていて不在だった可能性があります。三浦班長が東棟2階の総務課に上がると、町長の加藤さんらが潮位計らしい機器を観察していました。「町長、津波が来てるそうです!」。あわてて伝えますが、加藤さんの反応は鈍かったといえます。

三浦班長は再び庁舎前に下り、避難誘導の人員が手薄だと判断した御社地ふれあいセンター方面に走って行きます。津波が襲来したのは、それから間もなくのことでした。

裏庁舎と本庁舎の間を往復していた小笠原佑樹・水産商工班主事も、裏庁舎北側の駐車場で工務班主査の三浦徳幸さんが四輪駆動車の脇に立ち、カーラジオから流れてくる津波の情報を周囲に伝えるのを聞いていました。また、管理班主事の前川美知さんと臨時職員の前野千恵さんが連れ立って、裏庁舎の玄関から出て行ったとの情報があります。小笠原主事は前述のように、この時間帯に臨時職員の前野さんと小國奈穂子さんを裏庁舎の階段で目撃した可能性が捨て切れず、先の情報と小笠原主事の証言を総合すると、前川さん、前野さん、小國さんの3人は何らかの指示があつて午後3時15分前後に裏庁舎を後にしたのかもしれませんが。

六串俊範さんら車で役場方面へ

このころ、産業振興課農政班主査の故六串俊範さん



兼澤圭作さんがトラクターを止めた新山牧場の事務所周辺。中央の車は実際に兼澤さんが運転してきたものだという

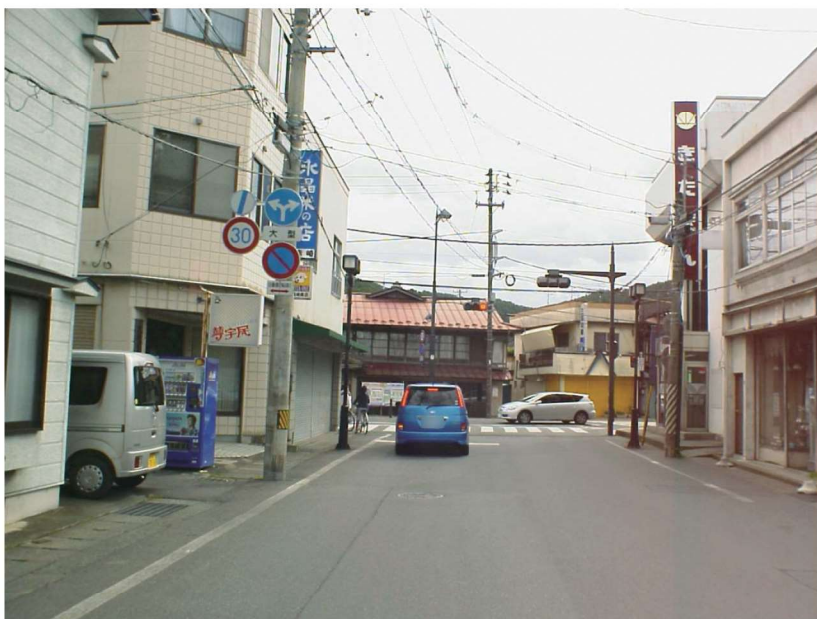


役場方面（右側）に向かう六串俊範さん運転の車が目撃されたJR大槌駅（当時）付近の県道交差点=2008年9月撮影

Ⅱ当時(46)Ⅱの運転する公用車の白いバンが県道大槌小鎚線、上町の小鎚神社の参道入り口付近を役場方面に向かって通過しようとしています。六串さんは新山牧場に除雪用トラクターを置いてきた畜産振興公社職員の間兼澤圭作さんを迎えに行った帰途で、同班臨時職員の故佐野雅樹さんⅡ当時(29)Ⅱも同乗していました。の

ちに同牧場の事務所付近にトラクターが止めてあったのが確認されていて、周辺の公道を除雪する目的だったと思われる。小鎚神社参道入り口付近で住民の避難誘導に当たっていた町民課の太田信博・町民生活班主任が公用車に気付き、手を振ると停車。ウインドーが開き、運転席の六串さんは「大丈夫だべか」。

「いやあ、行かねえ方がいいんじゃないすか」と太田主任。六串さんは「分かった、分かった」と言いつつも、そのまま東進します。約160以先の大念寺参道入り口付近の県道で、避難誘導担当の材津祐貴・福祉課介護班主事が同じ車を目撃します。そこからさらに約300以離れたJR大槌駅（当時）入り口付近の県道では、指定避難場所の小鎚神社に向かうために車で西進中だった関貴紀・農政班主査



阿部久美子さんらを乗せる車が通過した北日本銀行付近の県道交差点。左側が役場方面＝2008年9月撮影

も、スピードを上げて急ぐその車を見ていました。六串さんらの後、釜石市の研修会場から戻ってくる途中の地域包括支援センター班長の阿部久美子さん、社会福祉士の小笠原裕香さん、臨時職員の岩間成子さんの同乗する白い軽自動車も小鍬神社前の県道を通り、一瞬、太田・町民生活班主任と小笠原さんの目が

合います。車はさらに進んで、材津・介護班主事の目の前に止まります。

「みんな、どうしてる?」。材津主事の記憶では、車内から阿部さんが尋ねました。本震の直後に裏庁舎から大念寺に向かった材津主事は「俺、すぐ出て来ちゃったんで、ちょっと分からないんです」と答えます。発進した軽自動車は末広町の北日本銀行大槌支店付近の交差点を通過し、城山公園の公衆トイレの鍵を開けに向かう地域整備課管理班の久保、小國両主事の乗る公用車とすれ違いました。

加藤宏暉さん、総務から本部へ

再び、庁舎前に目を転じます。城山の中央公民館から下りてきた伊藤正治教育長は推定午後3時15分撮影の写真⑦(34ページ)⑪(37ページ)に納まった後、潮位計を観察しに東棟2階の総務課に上がった町長の加藤さんの後を追います。津波の翌12日に記した教育長自身のメモなどによると、加藤さんは2階の窓から「2メートル」の潮位計の数値を下の災対本部に伝え、再度同本部に

下りて行きます。伊藤教育長はそのまま総務課に居残り、津波襲来まで潮位計の変動を災対本部に実況し続けました。この前か後、伊藤幸人・企画班長は加藤さんと総務課長の澤舘さん、企画財政課長の木村さん、町民課長の佐々賢一さんが災対本部のテーブルで町の白地図を囲んでいる姿を目にしています。

「お父さんは役場にいます」。福祉課長の関郁夫さんは、妻信子さんといち早く城山に避難した長女が午後3時12分に携帯電話のメールで安否を問うと返信し、当時仙台市に住んでいた次女の身を案じました。記録された返信の時刻は同15分でした。

5 津波1分前〜津波襲来

住民情報持つて歩きだす

津波が役場庁舎を直撃する1分前、三浦義章・総務広聴班主事は災対本部周辺の状況を3枚の写真に収めていました。

写真⑫では、設営が終わったと思われる災対本部のテーブルの脇で総務課長の澤舘純一さんが平野公三・総務広聴班長と向き合い、城山方面を指さして声を発しているようです。この時間帯、平野班長が澤舘さんに「このままいては、やばいんじゃないでしょうか」と問い掛けると「ああ、まずいな」と同意したと



写真⑫

いいいます。

同じ写真で澤館さんの右横にいる職員情報班主事の花石一さんは、リュックサックのストラップのようなものを肩に掛け、澤館さんの話に耳を傾けているように見えます。森田英之・課税班主任は、花石さんがリュックを背負って災対本部に現れ、「D A T^{ダット}を持つてきました」と言うのを聞いています。

D A Tとは住民基本台帳や戸籍などの住民情報を記録した磁気テープのことで、総務課で毎日データをバックアップしていました。さらに伊藤幸人・企画班長は城山方面に向かって歩いて行く花石さんの後ろ姿を見ていました。菊池信也・財務班主事はこの時、職員情報班主事の齊藤充さんも一緒だったと記憶しています。花石さんは常に上司から非常時には必ずD A Tを持ち出すように指導されていたといいます。

写真③(25^{ページ})で作業着の上下だった地域整備課長の小川千里さんは写真⑫では防寒着とヘルメットを着けていて、いったん同課のある裏庁舎に戻ったらしいことが分かります。1階のロッカー室で装備したのかもしれない。町民生活班長の金崎健悦さんは、森田・

課税班主任と会話しているようです。金崎さんはこの時「やばいぞ、これ」と話していたといいます。

津波直前まで記録取る

さらにその後方では、後ろ姿の国保年金班長の里館ひろ子さんが税務会計課長の祝田眞悟さんと向き合っているように見えます。正面玄関前の松の囲いに置かれた水玉模様の青い手提げバッグは、御社地ふれあいセンターから戻った課税班主任の上野芳子さんの私物かもしれない。上野さんはバッグを同僚の出納班主事に預け、「町内に住む親戚の様子が心配だから見てくる」といったん役場を後にしたといいます。

写真⑬で、町民課長の佐々賢一さんと企画財政課長の木村圭治さんが並んでテーブルに着き、作業をしています。机上には鉛筆や付箋、セロハンテープなどの文房具のほか、企画財政課の震度計から吐き出されたと思われるロール紙があります。佐々さんはロール紙の数値を読み上げ、隣の木村さんがそれをメモ帳に転記しているように見えます。写真が撮影されたと推定



写真⑬

される午後3時20分ごろまでに本震と余震を合わせて14回の地震が観測されており、木村さんはその時刻と震度を記していたのかもしれませんが。コートの左胸のポケットには職員用防災手帳を入れています。

東棟玄関に近い災害発生即応対応表の前では、総務広聴班主事の佐藤一葉さんと小笠原広樹さんが立って



写真⑭

います(写真⑭)。佐藤さんは青いペンを右手に持ち対応表に何らかの情報を書き込んでいる最中、左隣の小笠原さんは走り書きのメモらしいものに目を通しているようです。時系列の「対応内容」の欄には上から「報発令」「設置」「から救出済」の文字が見え、いづれも佐藤さんの筆跡と思われる。この5分前の写真

⑨(35頁)などに写る対応表にはまだこれらの文字はありません。

この直前か直後、午後3時15分ごろに釜石市から戻った総務課の四戸直紀・総務広聴班主事が浪板地区の浪板川で軽自動車が流されているとの無線機の情報を聞き、対応表に記入しようと思いますが、動揺のあまりペンを持つ手が震え、どうしても「浪」の字が思い出せません。「ああ、駄目だ」とつぶやくと、見かねた小笠原さんがペンを受け取ってくれました。

城山移動を検討か

町民課の平野正晃・国保年金班主事によると、津波の少し前、災対本部のテーブルから少し離れた銀行の現金自動預払機のそばで介護班主事の倉堀健さんが「早く城山に行かなきゃ」と周囲に漏らし、歩きだしました。平野主事は、倉堀さんが本部中枢で城山への移動を検討している雰囲気を感じ取り、進まない事態にしびれを切らしたような様子が印象に残っているといます。

津波が町中に迫りつつあった午後3時20分ごろ、消防署が防災行政無線で高台避難を呼び掛ける2度目の放送をします。NHKは釜石港が浸水する状況を3時14分から20分にかけて中継しており、それを見た白澤岳副士長がアナウンスしました。消防署の放送は、小笠原純一・学務班主任が城山から携帯電話で町内を撮影した動画に録音されており、津波がJR大槌駅(当時)付近に到達した3時21分にチャイム音と共に終わっていました。直後、消防署にも津波が押し寄せ、白澤副士長はぎりぎり署の屋上に逃げ延びました。

澤舘純一さん、高台退避を号令

総務課長の澤舘純一さんはいかに城山への退避を号令します。少なくとも4人の職員——平野正晃・国保年金班主事、四戸・総務広聴班主事、森田・課税班主任、小笠原佑樹・水産商工班主事が澤舘さんの声を聞いていました。発言内容の記憶は少しずつ異なります。「城山、移動!」「もうやめ、やめ。城山行くぞ!」「ここにおいてもどうにもなんねえ」「行くぞー!」。菊池信也・

財務班主事は声の主を覚えていませんが、「(誰かが)一部で発した(退避を呼び掛ける)声がざわざわと広がっていった」と思い起こします。

前後して岩手東海新聞記者の故佐々木正樹さん(当時57)のシルバーの乗用車が県道大槌小槌線から庁舎前に入ってきて来て、正面玄関の前を左に曲がります。同級生で親しい友人だった国保年金班長の里舘さんが車に駆け寄って行くのを、赤崎仁一・議会事務局長が近くで見えていました。このすぐ後のタイミングなのか、森田・課税班主任によると、里舘さんは「炊き出しに行ってくる」と周囲に声を掛け、東棟玄関に入っていました。里舘さんの車は飼い犬を乗せたまま東棟東側の公道に止めてありました。

津波知らせた佐々木庸介さん

この直後のことでした。「津波だー!」。ひときわ大きく、男性の叫び声が響き渡りました。当時災対本部周辺にいて、今回の聞き取りに応じた15人全員が聞いており、そのうち13人が出納班長の佐々木庸介さんの

声だと記憶。さらに2人は正面玄関の庇ひさしの下、自動ドアの前に立つ佐々木さんの姿を覚えていました。その位置からは、約500メートル先に海があり家屋の立ち並ぶ南の方角がまっすぐ見えます。これとは別に、正面玄関に直面する電話ボックスのそばに佐々木さんが立っていたり、向かいのガソリンスタンドの方から声が聞こえたりしたなどという証言もありました。

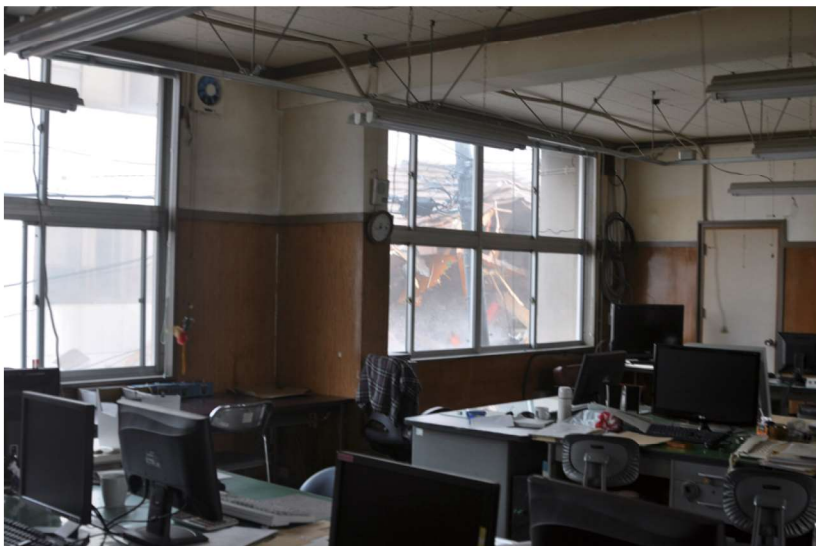
大津波は町を取り囲む海面からの高さ6・4メートルの防堤と、役場から東に約200メートルの大槌川に沿う河川堤防をたやすく乗り越えて市街地に流入。黄色い土煙を上げながらすすまじい速さで家々をなぎ倒し、巨大な「黒い壁」となって職員たちの目の前に迫っていました。

庁舎前の職員たちは一目散に中央棟と東棟の玄関、西棟の外階段に駆け込みます。庁舎周辺で生還した職員21人のうち少なくとも12人が中央棟、3人が東棟、2人が西棟に逃げたとみられ、屋上などに避難しました。

三浦義章・総務広聴班主事は伊藤幸人・企画班長と東棟2階の総務課に入り込み、東側の窓から国保年金班長の里舘さんの車に津波が直撃(写真⑮)し、同じ



写真⑮



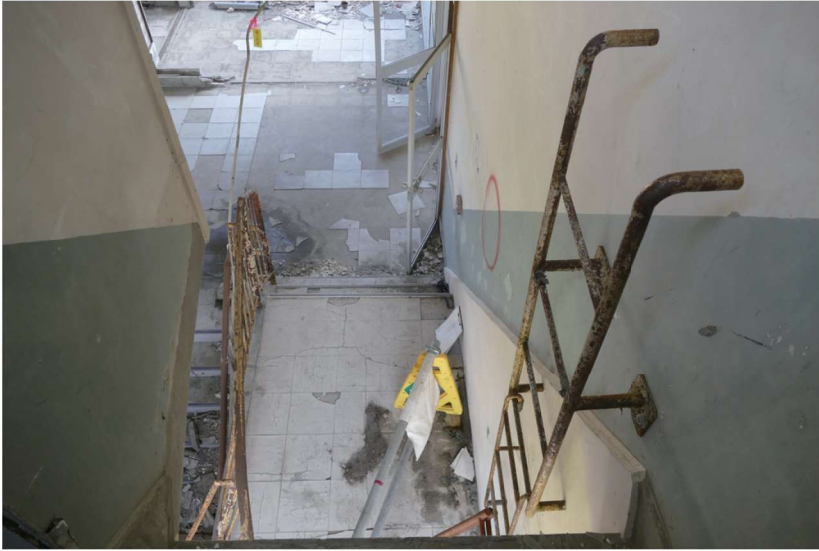
写真⑯

窓を今にもがれきが打ち破ろうとする状況(写真⑮)を撮影。デジタルカメラの時計が約5分進んでいたと考えると、役場に津波が到達した時刻は午後3時21分ごろということになります。総務課で潮位計を見ていた伊藤正治教育長も一緒に中央棟に向かって廊下を走りますが、3人とも濁流にのまれてしまいます。

税務会計課の出納班主事と課税班主任が中央棟の階段を2階に上り切ると、海のある南側に窓の開くフロアが眼前に広がります。そこでは出納班長の佐々木庸介さんがたたずみ、窓の外を見ていました。2階から屋上に通じる踊り場の先には階段が3段しかなく、代わりに、西側の壁面に計7段の鉄製のはしが取り付けてありました。職員たちはそこに殺到します。もともとあった階段4段目以上は昭和54(1979)年に中央棟に密着させる形で鉄骨造2階建ての庁舎を増築した際、二つの建物の間を行き来するために壁を打ち抜く過程で撤去されていました。

女性助ける金崎健悦さん

屋上に至った職員21人のうち15人がこのはしごをよじ登り、残り6人は庁舎内で津波に巻き込まれ



津波襲来時、職員が伝った中央棟2階の鉄製はしご。金崎健悦さんが上がろうとする女性職員を助けていたという=2018年6月撮影

た後に助け上げられたり、天井裏に逃れたりして九死に一生を得ました。課税班主任の記憶では、町民生活班長の金崎健悦さんがはしごを上ろうとする女性職員を助けていました。

中央棟北の増築庁舎2階には、既存庁舎との接合部に面する廊下を挟んで、内部が仕切れる構造の東西に

長い会議室がありました。はしごを上らずに横切り、まっすぐ会議室に逃げ込んだ人もいました。同じ行動を取った平野正晃・国保年金班主事は亡くなった複数の男性職員の姿を見ているますが、それが誰だったかは確信が持てないといえます。平野主事ははしごで滞る女性職員を助けようと引き返し、そのまま屋上に逃れました。

四戸・総務広聴班主事は、はしごの下で女性職員を押し上げている最中、膝の高さまで来た水の勢いで転倒し、増築庁舎側に流されました。とっさに会議室に入り、北側の窓の近くにあった長机に飛び乗ると、総務課長の澤舘さんが水をかき分けながら歩いて現れます。澤舘さんが出入り口の引き戸近くの長机に上がり、お互いの目が合った次の瞬間、水の塊がどっと入り込んできて天井に達しました。四戸主事は溺れそうになりながら水圧で破れた会議室の北面の壁から脱出し、水の上に顔を出しましたが、近くに澤舘さんの姿はありませんでした。

はしご周辺の記憶は混乱

証言を総合すると、鉄製はしごに最初に手を掛けたのは森田・課税班主任で、二番目に平野公三・総務広聴班長、三番目に小笠原佑樹・水産商工班主事が続いたとみられますが、その後の12人の順序はよく分かりません。はしご周辺の状況は証言者によって記憶がまちまちで、極度の混乱状態だったことがうかがえます。はしごの5段目に足を掛けたすぐ右側には既存の踊り場が突き出っていて、そこから幅約1.5・10段ほどの狭い階段を上がると、屋上に出るノブの付いたアルミ製のドアが現れます。このドアは立て付けが悪くてすぐに開かず、避難した職員は踊り場北面の窓から屋上に足を踏み出したようです。

逃げ遅れた本部要員

中央棟玄関前で待機していた、主に災対本部で役の付いていない職員たちは、ほぼ直線的な移動による最短距離で中央棟の階段を駆け上がることができまし

た。はしごを上った15人の大半はそのような人員でした。一方、幹部職員や総務課員の多くは中央棟玄関より東棟玄関に近い災対本部のテール付近にいて、中央棟に向かってまっすぐ走れなかったり、東棟に入ったりして逃げ遅れたものと考えられます。

実際、東棟玄関に逃げ込んだ伊藤幸人・企画班長と三浦義章・総務広聴班主事は中央棟のはしごまで至ることができず、中央棟と東棟の2階接合部付近で津波に巻き込まれています。しかし、犠牲職員の誰がどの方向に走って行ったかは、中央棟2階の窓際で目撃された出納班長の佐々木庸介さんを除き、具体的な証言がほとんど得られませんでした。

地域包括支援センター班長の阿部久美子さん、福祉士の小笠原裕香さん、臨時職員の岩間成子さんを乗せた軽自動車は、午後3時15分過ぎに県道大槌小鍬線で城山に向かう地域整備課の公用車とすれ違った後、役場まで到達できず、末広町で津波に襲われました。



津波にさらされる役場庁舎（奥の建物）。屋上の塔屋に職員が逃げ込んでいるのが見える＝2011年3月11日午後3時25分、植田俊郎さん撮影

6 15時25分ごろ～翌朝

佐藤一葉さんに似た女性が

再び役場屋上です。逃げ延びた15人はさらなる津波

の襲来を恐れ、程なくして屋上の階段室に突き出た塔屋にはしごを伝って上がります。眼下では大荒れの海のように黒い水が波打っています。庁舎内で津波に巻き込まれた三浦義章・総務広聴班主事と伊藤幸人・企画班長は東棟2階北端のトイレに流され、水中をもがいてガラスの破れた窓から外に抜け出ます。伊藤正治教育長は中央棟2階東南角の副町長室前の廊下で水にのまれますが、水圧で倒れてきた壁に乗り、かろうじて同室の屋根裏に逃れます。

三浦主事がトイレ横の水面に顔を出すと、そこから北側の少し離れた所に四戸直紀・総務広聴班主事と監査班長の前川正志さんが漂流していました。前川さんの位置については、聞き取りに応じた最初期の屋上避難者13人の大半が中央棟北増築部分の東側と東棟北側に挟まれた一帯だったと記憶しています。

四戸主事は、自身より3歳ほど西側でメガネの外れた前川さんが顔だけを出して浮かんでいたのを見ました。さらに西側の奥では総務広聴班主事の佐藤一葉さんに似た黒髪の女性が流されていました。

この女性と同一かもしれない人物が家屋のベランダ

のような物にしがみついていたのを、小笠原佑樹・水産商工班主事と平野正晃・国保年金班主事が覚えています。平野主事は女性に「もっと上に乗って」と声を掛けますが、無言だったといいます。

三浦義章主事と伊藤幸人班長は自力で東棟屋上によじ登りました。そこに、隣接する中央棟2階副町長室の東側の天井裏窓から伊藤正治教育長はいい出てきて、合流します。3人は中央棟屋上の塔屋から下りてきた数人の手を借りて、2・5メートルほどの段差がある中央棟側に取りつきました。間もなく、2回目の大きな波が東棟屋上をさらっていきました。

家の屋根にしがみついた四戸主事は、この波で北西に約400メートル離れた県立大槌病院の手前まで持って行かれ、さらに引き波で500メートル海側に戻されたものの、大槌川河口の大町雨水ポンプ場のバルコニーに飛び乗って危機を脱しました。

前川正志さんに垂れ幕投げる

平野正晃・国保年金班主事、小笠原佑樹・水産商工

班主事、赤崎仁一・議会事務局長らは、流されている監査班長の前川正志さんの救助に乗り出します。屋上には平成21(2009)年の町制施行120周年を祝うビニール製の垂れ幕が置いてありました。その先端に金具や重りになりそうなバッグ状の物を結び付けては取り換え、中央棟北増築庁舎の東のへりから何度も投げますが、垂れ幕は幅が広く、それ自体に重さがあったので、どうしても遠くまで届きません。

前川さんはひしめくがれきの間で、大きな屋根のような物につかまっていた。 「上に乗がれ」 「がんばれ、がんばれ」。職員たちの励ましに表情で応えているようでしたが、水に浸かり凍えて消耗したためか、自ら声を発することはありませんでした。伊藤・企画班長や赤崎・議会事務局長の記憶では、前川さんは2回目の大きな波の次の引き波に連れて行かれ、見えなくなっていました。

海に吸い込まれた裏庁舎

平野公三・総務広聴班長は塔屋の上から、津波の威

力で木造の裏庁舎が根こそぎ浮かび上がるのを見ていました。建物は北西に約400メートル、大槌病院の手前まで流された後、引き波に戻されて役場庁舎の西側を通り、300メートル離れた大槌川河口の河川堤防の切れ目から海に吸い込まれていったといえます。建物の中では男性らしい複数の職員が動いているのも遠目に見えたということです。

屋上の職員は最初にはしごを上がった15人に伊藤正治教育長ら3人が加わり、さらに西棟の屋根裏に逃れた税務会計課の祝田茂・収納班主査と太田和浩・同班主任ら3人が日没後に合流、21人になりました。夜、大きな車座になって垂れ幕を体に巻き付け、水が引いた後に庁舎内で拾った木の切れ端でたき火をするなどして、厳しい寒さをしのぎました。翌12日午前9時半ごろ、職員らは飛来した航空自衛隊の大型輸送ヘリに救助され、西に約2キロ離れた寺野地区の屋内運動場に避難しました。



役場周辺で避難者を救助する自衛隊の大型ヘリ＝2011年3月12日、植田俊郎さん撮影

発災後の役場周辺などの主な出来事

3/11 14:46	三陸沖震源の本震（震度6弱）発生
14:48 過ぎ	役場にいた職員約50人の多くが庁舎前などに出てくる
14:49	気象庁が岩手県に大津波警報と3㍎の津波予想高さを発表
14:50 ごろ	地域整備課長小川千里さん、課員に待機を指示
14:51	福島県沖震源の余震（震度3）発生
14:56 過ぎ	消防署が防災行政無線を放送し、高台避難を呼び掛ける
14:57	町長加藤宏暉さんら多くの職員が庁舎前に集まっている
14:57 ごろ	総務課長澤舘純一さん、災対本部設置を指示
14:58	町長加藤さん、役場の井戸水ポンプを観察
14:58	福島県沖震源の余震（震度3）発生
15:00 ごろ	福祉課長関郁夫さん、課員に城山への避難を指示
15:05 ごろ	生涯学習課が地域整備課に城山公園トイレの解錠要請
15:06	岩手県沖震源の余震（震度4）発生
15:08	岩手県沖震源の余震（震度3）発生
15:10 過ぎ	農政班主査六串俊範さんら3人の乗る公用車が役場方面に向かい、JR大槌駅（当時）付近の県道を通り
15:12	福島県沖震源の余震（震度3）発生
15:14	気象庁が岩手県の津波予想高さを6㍎に引き上げ
15:14	NHKのテレビ・ラジオ同時放送が釜石港への津波到達を報道
15:15	茨城県沖震源の余震（震度3）発生
15:15	災対本部の設営作業進む
15:15 ごろ	工務班主査三浦徳幸さん、裏庁舎北側駐車場で出動準備
15:15 ごろ	町長加藤さん、総務課で潮位計を観察
15:15 過ぎ	地域包括支援センター班長阿部久美子さんら4人の乗る軽自動車役場方面に向かい、北日本銀行付近の県道交差点を通り
15:20 ごろ	消防署が防災行政無線を放送し、高台避難を呼び掛ける
15:20	総務課長澤舘さん、災対本部で城山方面を指さす。その後、城山への退避を号令
15:21 ごろ	大津波が役場庁舎に到達。出納班長佐々木庸介さんが大声で危機を知らせる
15:22 ごろ	職員15人が中央棟2階のはしごを伝って屋上に避難。その後、6人が合流
15:25 ごろ	監査班長前川正志さん、総務広聴班主事佐藤一葉さんに似た女性が中央棟北側の水面を漂流
3/12 9:30 ごろ	屋上の職員21人が自衛隊の大型ヘリによって救出

※地震発生や気象庁の発表、NHK報道以外の時刻は推定。地震は釜石市で震度3以上を観測したものを記載

